

# 茗溪学園中学校高等学校

## 茗溪学園と学寮

教務部長 田代 淳一

茗溪学園中高は国際基督教大学高校、同志社国際中高と同時期に帰国生受け入れ校の認可を受けて設立された学校なので、開校以来寮を備え、中学1年生から高校3年生まで全国世界中の生徒に門戸を開き続けています。編集長からのリクエストもあり、今回は Study Skills から離れて茗溪学園の寮のお話です。

### 茗溪学園寮のモデル

本校の高校1年次に“読書会”という7～8人の生徒に教師がひとりついて語り合うという行事がありますが、その課題図書が開校以来『自由と規律』という不朽の名著です。著者池田潔氏が大正時代にイギリスのパブリックスクール、イートン校に留学した体験から大英帝国の繁栄の底流となっているパブリックスクール・オックスブリッジという“精神システム”を見事に考察したのですが、

そこからも窺えるように茗溪学園の学寮のモデルのひとつがパブリックスクールです。以前はこういう話をしてもなかなかピンときてもらえませんでした。今は映画『ハリー・ポッター』のおかげで随分イメージしてもらいやすくなりました。昔からの日本の学生寮・生徒寮というと、舎監という寮管理人が一人いて賄さんがご飯を用意して大部屋で・・・というイメージでしたが、パブリックスクールの寮はちょうど Hogwarts 校のグリフィンドールやスリザリン、レイブンクローやハッフルパフのようにそれぞれの寮に教師がハウスマスターとなって寮生と生活を共にし、校長も寮に住み、青年期の重要な人格形成に関わるというものです。

茗溪学園の寮はもちろんお城ではありませんし、全寮制でもありません。でも、この校長以下、寮生の生活は教員や卒業生、元教員がハウスマスターとなって担当し Social Skill の獲得を含めて大事な人格形成にあたるという基本スタンスは継承しています。

もうひとつモデルにしたのが、山形県にある基督教独立学園という全寮制の学校です。この学園の労作教育ほどすごい教育はできていませんが、自分のことは自分でさせる、上級生が率先垂範し、異年齢集団での教育を核に据えるという考え方は学んでいます。

寮生の生活

茗溪学園の寮は学校の隣接敷地に東西南北4つの4・5階建の建物で構成されています。基本構造は4人部屋で、収容可能人数は530名です。ピーク時は450名ほどの寮生が暮らしていましたが、ここ5～6年は100名～120名前後で推移しています。

### 寮生の生活

中学男子、中学女子、高校男子、高校女子の4つの“フロア”がハリー・ポッターのグリフィンドールなどに該当し、それぞれハウスマスターと一緒に生活しています。生徒人数構成は、例えば現在は中学男子30名、中学女子16名、高校男子47名、高校女子31名、高校男子だけ人数が多いため2つの“フロア”にしています。寮室は、通常は中学は3～4人、高校は2～3人部屋です。高校3年生だけ、人数にゆとりのある場合は1人部屋になる場合もあります。

しかし、茗溪学園の寮の基本的考え方は共同生活・集団生活を送る中でお互いを尊重しあう心や自制心・周りを思いやる心を育て、どんな環境でも力を発揮できる精神を鍛え、世界に飛び出して本当にいい仕事を成し遂げる人物を育てるというものなので、“個人主義”は認めません。各寮室は異年齢で構成されますが、最上級生が室長になって室員の生活の責任を負います。“フロア”はハウスマスターと補助のサブマスターという教員、生徒の室長会で運営されます。寮室はベッド・収納のある居室と、学習机・本棚のある学習室で構成され、トイレや洗面室・洗濯室、冷蔵庫のあるアイロン室、インタ

